検証！「南京事件」の発信源

米国人宣教師たちの中国軍びいき

ジャーナリスト 池田悠（いけだ・はるか）

発信源は米国人宣教師

南京で30万人の虐殺はあり得ないが、数万人はあったのではないか。誇張される前の何らかの事件の核があったのではないか。このような考えは一定数の日本人が持っているように思う。

その事件の核を示すのは、戦後突如現れた記録でなく、日本国内では知られずとも海外では広く知られていたと言われる、当時の記録であろう。確認すると、内容の真偽はともかく、米国を中心に、新聞で、雑誌で、書籍で、また宣教師の手紙で、と様々なチャネルで当時、南京事件が伝えられている。

ここで一つ指摘したいのは、これら当時の南京事件の発信源は、ほぼ全て米国人宣教師であったという事実である。

例えば、事件の初報といわれる一連の新聞記事の基になった声明、著名な米リーダーズダイジェストの記事『南京の略奪』『我々は南京にいた』、またマンチェスター・ガーディアン紙の記者ティンパーリ氏が編集したベストセラー『戦争とは何か』中の記録は全て宣教師によるものである。

ちなみに、忘れられがちであるが、南京に残留した14人の米国人は全員宣教師であった。要するに、これら米国人宣教師の当時の発信の真偽が、南京事件の核の真偽、つまり南京事件の有無を示すのである。そこで本稿では欧米の一次史料を基に、南京残留の米宣教師たちの思考と行動を検証する。

ミルズ宣教師の告白

当時の南京の米国人宣教師たちの考えを端的に表す記録があるので、ここに引用する。

「私たち〔宣教師〕の会合で、ミルズ氏は強い願望を表明した。すべての教育を受けた人々を欧米に行かせる代わりに、宣教師の一団が降りて中国軍を手助けし安心を与えるよう試み、混乱と略奪の中、小集団であってもそれが中国にとっていかなる意味をもつかを彼らに知らしめた方がずっと良いと」（1937年11月18日ヴォートリン＝写真305頁）

これは簡単に言えば「布教の為に中国軍を支援保護したい」という発言であるが、このミルズ氏に関し、今まであまり触れられていなかったように思うので少々紹介し、発言時の状況を説明する。

ミルズ氏（Wilson Plumer Mills）は1883年サウスカロライナ州に生まれ、1912年にコロンビア神学校で神学士号を取得後、1931年までYMCAの下で中国で活動し、1933年からは長老派教会の宣教師として南京に赴任している。1937年の南京戦時は54才であり、共に活動した宣教師、当時40才のベイツ氏や36才のスマイス氏よりだいぶ上である。

南京で難民保護の為の安全区・国際委員会を発案したのはこのミルズ氏であり、委員長を務めた独人ラーベ氏が南京を離れた後は、委員会の後継組織の代表を務めている。ミルズ氏は南京の米国宣教師団、また国際委員会におけるリーダー的人物であった。そして、先のミルズ氏の発言は、安全区設立の前日、その設立を報告した宣教師内部の会合でなされたものであった。

この発言は二つの重要なことを示している。一つは、宣教師のリーダー的立場のミルズ氏の発言で

池田悠氏　昭和54年、埼玉県生まれ。東京大学経済学部卒業後、通信技術系ベンチャー企業役員、衆議院議員秘書等を経て、独立。経営コンサルタント、ジャーナリスト。南京戦の真実を追求する会理事。

あるので、米国宣教師団として中国軍の支援保護の意思があったこと。そして二つ目は、宣教師内で安全区設立を報告した会合においての、安全区発案者による発言なので、つまりこれは、難民保護を名目に設立する安全区に於いて中国軍の支援保護を行いたい、という大胆な意思表明ということである。

まず一つ目より、宣教師たちは中国軍への支援保護の意思を明確にしているので、彼らの南京事件の発信は中立性に欠けることが分かる。

ただ、中国軍を支援保護することが、直接、南京事件の発信という行動に結びつくわけではない。なぜ、彼ら宣教師は熱心に南京事件を発信したのであろうか？　結論を先に言えば、二つ目の点、安全区内での中国軍の支援保護を実行するために南京事件が必要だったのである。この点に関し、宣教師たちの行動を追いながら、論証しよう。

南京安全区は成立していたか

まず、舞台となる「安全区」について説明する。

米宣教師の主導で作られた南京の安全区は、上海の安全区を真似たものである。上海の安全区は、第二次上海事変勃発に際し、仏人ジャキノ神父が中心となり、戦闘時の難民保護を目的に、近隣の仏軍の軍事力を背景に当該エリアの中立・非軍事化を約束し、日中双方の了承の下、設置されたものである。さらに日本軍が進駐した際には日本の統治下にはいることも合意されていた。

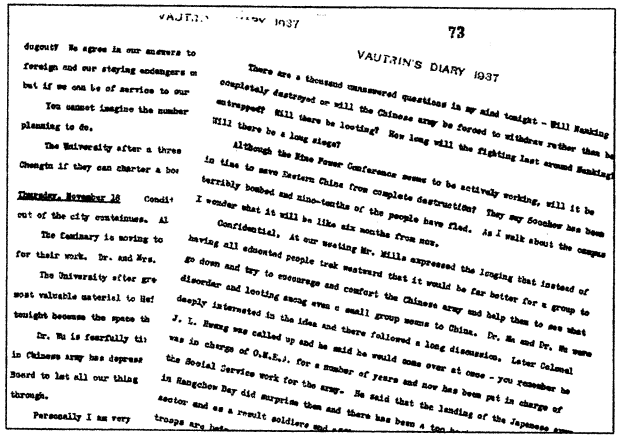
一方、南京の安全区は同様に戦闘時の難民保護を目的に掲げたが、元々中国軍の砲台のあるエリアであり、中立の第三者の軍事力もないので、日本は中立・非軍事化が難しいであろうと判断し、承認していない。その上で軍隊・軍事施設が無ければ攻撃を避けるよう努めるとした。国際法上、中立地域・非戦闘地域は当事者双方の合意が無ければ成立しない。つまり南京の安全区は、上海と異なり、中立・非戦闘地域として不成立であり、何の保証も権限もないものであった。

第529回　**正論を聞く集い！**

講　師：村田春樹
（自治基本条例に反対する会会長）
テーマ：「三島由紀夫と大東亜戦争」

日時●11月27日(火)午後6：30～8：30
会場●大手町サンケイプラザ・3階
会費●一般1,500円・学生1,000円

お問い合わせ・主催・正論の会
（代表・三輪和雄）
〒107-0062 東京都港区南青山7-9-8
TEL：03（3407）0637



VAUTRIN'S DIARY 1937

73

VAUTRIN'S DIARY 1937

There are a thousand unanswered questions in my mind tonight - Will Nanking completely destroyed or will the Chinese army be forced to withdraw rather than be entrapped? Will there be looting? How long will the fighting last around Nanking? Will there be a long siege?

Although the Nine Power Conference seems to be actively working, will it be in time to save Eastern China from complete destruction? They say Soochow has been terribly bombed and nine-tenths of the people have fled. As I walk about the campus I wonder what it will be like six months from now.

Confidential. At our meeting Mr. Mills expressed the longing that instead of having all educated people trek westward that it would be far better for a group to go down and try to encourage and comfort the Chinese army and help them to see what disorder and looting among even a small group means to China. Dr. Ma and Dr. Wu were deeply interested in the idea and there followed a long discussion. Later Colonel J. L. Huang was called up and he said he would come over at once - you remember he was in charge of O.M.E.J. for a number of years and now has been put in charge of the Social Service work for the army. He said that the landing of the Japanese at Hangchow Bay did surprise them and there has been a ten-

地域・非戦闘地域は当事者双方の合意が無ければ成立しない。つまり南京の安全区は、上海と異なり、中立・非戦闘地域として不成立であり、何の保証も権限もないものであった。

国際委員会の実態

また安全区の管理組織である国際委員会についても説明しよう。設立声明では、「デンマーク人、ドイツ人、イギリス人、アメリカ人より構成される」とあるが、実態は以下のようであった。

「国際委員会が発足した。主要メンバーは米国人の鼓楼病院の医師たちと南京大学の教授たち。全員宣教師だ」（1937年11月19日ラーベ）

「委員会が発足した時には、取決めはほとんどできあがっていた。実際はきわめて党派的な集まりに、国際色を添えるために彼（英人シールズ*）が招かれたのは明白であった」（1938年4月25日コヴィル）

「ラーベ氏は委員長として並外れて大きな貢献をしているが、私の見解では、米国人にひどくたぶらかされ、米国の利益、また信者をごっそり獲得しようと狙う宣教師のために、先頭に立って働いている」（1938年2月10日シャッフェンベルク：南京独大使館事務長）

このように国際委員会と名乗りつつも、実態は米国宣教師団であり、委員長にまつり上げられた独

*シールズ（P.R. Shields）：英人。国際輸出社支配人。国際委員会メンバー。本稿のシールズ氏からの聞き書きは、米駐日外交官のカボット・コヴィル氏が、1938年4月南京を視察した際、シールズ氏から直接話を聞いたもの。これはグルー米駐日大使経由で米国務省にも報告された。

人ビジネスマンのラーベ氏は、米国・宣教師たちのために働く、操り人形という状態であった。

安全区での中国軍支援保護

それでは安全区で行われた中国軍への支援保護を確認しよう。

①中国軍のためのエリア設定

南京の安全区は、上海と異なり、難民にとって便利なエリアでなく、わざわざ砲台があるエリアに設定され、しかも砲台は戦闘中も使用され続けていた。以下証言がある。

「〔シールズが安全区に関し〕中国人の貧民区を含むようつくられるべきではないか、と尋ねたところ、場所の問題はすでに調査決定済みであるとだけいわれたという」「〔シールズ曰く〕安全区設定以前から中国軍は区内に大きな対空砲を設置していたし、その後も、引き続き使用していた」（1938年4月25日コヴィル）

「安全区内の南西側の境に対空砲がずらっと並んでいることに気が付いた」（1937年12月9日ラーベ）

これに対し宣教師は「〔唐〕将軍は首都防衛の任を帯び、安全区から軍隊と高射砲を一掃するという非常に困難な仕事に概して非常によく協力してくれました」（1937年12月24日フィッチ『戦争とは何か』所収）と虚偽の発信をしている。

②中国兵の保護

中国軍の敗走後、宣教師たちは安全区内に中国兵の流入を許し、さらに一部の武器の回収をもって武装解除したと言い、区内に潜伏した敗残兵には戦争捕虜の権利があるという奇妙な主張を展開した。日本軍は当然拒否し、難民からの摘出を図り一斉捜索を実施した。日本軍はその後も敗残兵の捜索を続けたが、宣教師たちは「今はこの地帯に武装解除された中国兵のグループは全くないと確実に保証することができます」（1937年12月18日『南京安全地帯の記録』）と非協力的であった。しかし事実は異なった。

当時の新聞を引用する。

「南京の金陵女子大学に、難民救済委員会の外国人メンバーとして残留しているアメリカ人教授たちは、彼らが逃亡中の大佐一名とその部下の将校六名を匿っていたことを発見し、ひどく気まずい思いをした。その将校たちは、中国軍が南京から退却する際に軍服を脱ぎ捨て、大学の建物の一つに住んでいるところを発見された。彼らが大学の建物の中に、ライフル六丁、拳銃五丁、砲台からはずした機関銃一丁、そして弾薬を隠していたことを日本軍の捜索隊が発見した後、彼らは中国兵であることを自白した」（1938年1月4日ニューヨークタイムズ）

この事件は、宣教師側の記録では、難民キャンプの責任者であるベイツ宣教師は兵士や武器の発見を認めつつも、「もし王〔大佐〕が元兵士なら我々は介入できない。軍隊の問題である。彼はよそ者としてここへ来た」（1937年12月31日『南京安全地帯の記録』）と責任回避している。

これら記録より、安全区内での敗残兵の潜伏と、武器の隠匿は明らかである。

この様に宣教師たちはミルズ氏の発言通り、安全区で中国軍の支援保護を行ったのである。

安全区を正当化する「南京事件」

ところで、何故、戦闘後も安全区が存在したのだろうか。非公認とはいえ、戦闘時は、軍隊・軍事施設が無い限り戦闘を避けるエリアとして、一定の存在意義があった。しかし、戦闘後は全く理由がない。実際、日本軍は早急に解散を求めている。しかし宣教師たちは断固として拒否し続けた。宣教師たちの言い分がジョンソン米駐中大使の発言に纏まっているので引用する。

「たしかに委員会の仕事は、日本軍が入城し、戦闘が停止した日をもって終わるべきものであった。しかしながら、入城した日本軍の南京市民に対する恐怖支配があまりにも激しかったために、外国人による安全区の治安維持と食糧提供を止めるわけにはいかなくなったのも確かである」

ジョンソン大使は、その根拠も示している。

「ジョージ・フィッチやベイツ氏に代表される委員会のアメリカ人メンバーが、日本軍の南京恐怖支配の期間における彼らの体験を、詳細に記録して南京から送ってきた。これらの記録は事実に基づいて書かれたものであるから、日本軍には彼らを恐喝する資格はない」（以上1938年2月7日天谷南京警備司令官の言明に対する態度）

まず、ジョンソン大使が根拠と

した委員会のアメリカ人、つまり宣教師たちの記録を検討しよう。彼ら米宣教師の記録は先に確認したように、安全区内の中国軍砲台は撤去した、兵士は武装解除済みである、兵士は存在しない、というように虚偽だらけである。また彼らが纏めた事件の訴えは、「これらすべての暴行事件は、単に一方の話を聞いただけだ」（1938年2月10日シャッフェンベルク）と、検証を経ない単なる伝聞であった。これら記録は信憑性に欠ける。

また、ジョンソン大使は、委員会管理下の安全区により治安が維持されたように言うが、この点も検証しよう。1938年2月、宣教師たちの猛反対を押し切り、日本軍は半強制的に難民を帰宅させ、安全区は消滅した。その直後の記録がある。

「我々はもはや虐殺の話を聞かなくなり、概ね秩序も回復した」（1938年3月4日シャッフェンベルク）

安全区の消滅後に治安が回復している。よって安全区の存在が治安を保ったというのは誤りである。宣教師たちの言い分はやはり正しくない。

一方、そもそも彼ら宣教師たちは、ミルズ氏の発言通り中国軍の支援保護のために、宣教師管理下にある安全区を維持する必要があった。真相は逆である。日本軍の恐怖支配に対して安全区が必要だったのではなく、安全区を存続させる名目を得るために、日本軍の恐怖支配、つまり南京事件を創り出す必要があったのである。これが南京事件の核である。真偽は明らかであろう。

宣教師の感化力

ここで南京事件の普及に関しても少々触れたい。中国側の働きかけについては既に多くの研究があるので本稿では省かせて頂き、宣教師たちの感化力に焦点を当てる。彼らは聖職者という欧米社会で信用ある立場である。彼らの言葉をジョンソン大使が信じたことは紹介した。実はこれは現地のラーベ委員長も同様であった。宣教師たちは入れ代わり立ち代わり日本軍残虐物語をラーベ氏に報告し、洗脳している。一例を挙げる。

「マギー〔宣教師〕がまたしても悪い知らせをもってきた。日本兵が手に入る食用の家畜を手当たり次第つかまえているとのことだ。

最近は、中国人の若者に豚を追わせている。手間取ったり、捕まえられなかった若者たちは、刺殺された。なかの一人は内臓がはみ出して垂れ下がっていたという。目撃者からこんな報告ばかり聞かされていると、気分が悪くなる。日本軍は釈放された犯罪者の寄せ集めというのがふさわしい」（1938年1月22日ラーベ）

ラーベ氏が虐殺を目撃したという記録はない。宣教師たちから目撃談とされるものを聞かされ、それを信じたのである。この様に、宣教を本業とする、彼ら宣教師たちの圧倒的な感化力があって、南京事件が広く信じられたのである。

宣教師史観からの脱却

現在、一般に流布している、南京事件の見方は宣教師史観とでもいうべきものである。彼ら米宣教師を中立の第三者として、彼らの行動を正当化したものである。

この見方は東京裁判で採用され今に至る。東京裁判で南京戦責任者の松井石根大将を有罪とするにあたり、圧倒的に有力とされたのは、「いろいろな国籍の、また疑いのない信憑性のある中立的証人」の証言であり、具体的には、独ファンケルハウゼン中将、独ラーベ氏、米宣教師達、の証言であった。

実際は、ファンケルハウゼン中将は蔣介石の軍事顧問であり、また、ラーベ氏、米宣教師たちについては、本稿で説明したとおりである。彼らは決して信憑性のある中立的証人ではない。宣教師史観から脱することで、圧倒的有力とされた判決根拠も完全に消滅するのである。

さてこれで、南京事件が虚構であることの概略は証明されたと著者は考えるが、いかがであろうか。読者諸賢の判断を仰ぐ次第である。

【引用・参照元】

○ヴォートリン：Diary of Wilhelmina Vautrin 1937-1940, Yale Univ.

○ラーベ／シャッフェンベルク：John Rabe, Der gute Deutsche von Nanking 1997, DVA

○コヴィル：Diaries of Cabot Coville 1938, Hoover Institution Archive

○天谷南京警備司令官の言明に対する態度：南京事件資料集　アメリカ関係資料編　1992年　青木書店

※引用文中の傍線また〔〕は、筆者の挿入。